



TITLE:

# 認知文法の観点からみた日本語指示詞の時間表現

AUTHOR(S):

田口, 慎也

---

CITATION:

田口, 慎也. 認知文法の観点からみた日本語指示詞の時間表現. 言語科学論集 2011, 17: 1-20

ISSUE DATE:

2011-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/155041>

RIGHT:

# 認知文法の観点からみた日本語指示詞の時間表現

たぐち しんや  
田口 慎也

京都大学大学院

shinya.taguchi84@gmail.com

## 1. はじめに

### 1.1. 日本語指示詞の研究史と時間表現の扱い

現在に至るまで、指示詞 (demonstrative) に関する数多くの研究が世界中でなされてきた。言語類型論の観点からの考察も盛んになってきている状況である (Lyons 1977, Levinson 1983, Diessel 1999, Lenz (ed.) 2003, etc.)。日本語の指示詞コソアについても、その現場指示や文脈指示などの用法に関して従来から様々な研究がなされてきた。佐久間 (1951) の現場指示におけるコソアの研究から、三上 (1970) によるコソアの二重の対立 (double binary) 構造の指摘、久野 (1973) によるア系指示詞の分析への「話し手の知識状態の差」という観点の導入、黒田 (1979) による「体験的知識」と「概念的知識」という知識状態の分類、金水・田窪 (1992) の談話管理理論による研究など、指示詞の記述・理論的な分析における重要な研究が数多く存在する。しかし、「この頃、このところ、そのうち、あの時」といった時間表現における指示詞については、まとまった考察がなされてこなかった。本論では、時間表現として用いられる指示詞に焦点を当て、認知文法の観点から考察を行う。本論の構成は次のようになっている。2 節では、指示詞の時間表現と関連する先行研究を概観する。また、3 節ではコ系・ソ系・ア系時間表現の具体例を分析し、その差異についても言及する。そして 4 節では、指示詞の時間表現の時間軸上での分布と知識状態の差を統合して分析するために Langacker (1991) において時制と法の分析に用いられているモデルを組み合わせ、認知文法の観点から指示詞の時間表現の考察を行う。最後に 5 節においてまとめと今後の課題を提示する。

## 2. 先行研究

以下では、日本語指示詞の時間表現が取り上げられている先行研究を概観する。

### 2.1. コ系時間表現に関連する先行研究

ここでは、コ系の時間表現と関連する「絶対指示」や「象徴的用法」に関する先行研究を取り上げる。従来の先行研究では、コ系時間表現には特殊な用法が存在し、コ系指示詞と「現在」が深い関連を持つことが指摘されている。

### 2.1.1. 堀口 (1978)

コ系時間表現に関わる概念として、堀口 (1978) では「絶対指示」が提唱されている<sup>1)</sup>。絶対指示とは、「場所・時間に関するもので、常に特定の対象を絶対的に指示する用法」と述べられている。まず、空間での絶対指示としては以下の例が挙げられている。

「ココ」「コチラ」「コノ町」「コノ国」などの近称で、常に話し手がその中に存在する場所を絶対的に表すものである。対話や手紙などで聞き手が特定の場合には、「ソコ」「ソチラ」「ソノ町」「ソノ国」などの中称で、常に聞き手がその中に存在する場所を絶対的に表すものである。  
(*ibid.*: 89)

また、時間での絶対指示については以下のように述べられている。

<絶対指示>には、ほかに時間を指すものがある。「この月」「この春」「このごろ」「この前」「これまで」「これから」などという近称が、話し手の存在する時間的位置つまり現在時を絶対的に指す用法である。これに対立する中称・遠称の用法はない。

(*ibid.*: 89)

上記絶対指示のコ系時間表現は、先行詞なしで用いられ、「現在」を指示する。「これに対立する中称・遠称の用法はない」が意味するのは、以下の金 (2004) でも述べられているように、「そのごろ」「あのごろ」といった表現は存在しないし、また「この前」「これまで」「これから」などを「その前」「それまで」「それから」などに置き換えると、全て文脈指示用法となり、ある特定の時間を指示する絶対指示の用法ではなくなってしまう。これが「時間での絶対指示はコ系表現にしか存在しない」という意味である。

### 2.1.2. 金 (2004)

「絶対指示」と関わる概念として、金 (2004) で提示されている「象徴的用法」がある。これは Levinson (1983) と Fillmore (1997) において“symbolic use”として提示された概念が日本語の指示詞分析に応用されたものである。象徴的用法とは「指示詞の語根を選ぶ余地が残されていない、常に特定の時間と場所、程度を指示する用法」であり、「発話の状況 / 直示の中心に関する情報があれば、指示対象が一意的に決まる」ものであると定義されている (*ibid.*: 14-15)。そしてそれは、「そのごろ」や「あのごろ」といった表現が存在しないことから明らかのように、ソ系やア系による代替が不可能であるという指摘がなされている。時間を指示する「象徴的用法」の具体例としては、「この頃」、「ここんところ」、「この夏まで」、「この歳」が挙げられている (*ibid.*: 14-15)。

(1) 「そうしてね、今日の朝、ママの家に行ったら、この頃あまり肉を食べてないだ

ろうからって、また肉さ。朝からほんとにまいったよ、まいった。」

(沢木耕太郎『一瞬の夏』)

- (2) 「ここんところ雨ばかりだねえ」茶店のおばあさんは、自分の茶わんにお茶をついだ。  
(井上ひさし『ブンとフン』)

- (3) 「水商売をやってる時に残しておいた金がいくらかあったんだ」  
「それで二月からこの夏までずっと暮らせたの？」

「うん、まあ……」

(沢木耕太郎『一瞬の夏』)

- (4) この歳になると、もう脂っこいものが食べられなくなった。

(金 2004: 14-15)

以上、堀口 (1978) と金 (2004) の研究を概観した。これらの先行研究で指摘されているように、コ系時間表現には特殊な用法が存在し、「現在」と深い関連を持つ。

## 2.2. 絶対指示以外の表現に関連する先行研究

### 2.2.1. 小泉 (2001)

小泉 (2001) では、「日本語の時間的直示詞」の分析として「この時」「その時」「あの時」が取り上げられており、以下の5つの特徴が指摘されている (*ibid.*: 27)。

- i) 日本語の現在は『いま』で表されるが、現在以外は、「この時」「その時」「あの時」と呼ばれ、これらには、「一方知識」と「共有知識」とが作用している。

- (5) 父: 「昭和20年8月15日に、太平洋戦争が終ったんだよ」  
子: 「その時、おとうさんはどこにいたの」(一方知識)

(*ibid.*: 27)

- ii) 話し手が自らの経験を「回想」する場合は「あの日」が用いられる。

- (6) 父: 「あの日はよく晴れていたなあ」(回想)

(*ibid.*: 27)

- iii) 共有の思い出は「あの時」で指示される。

- (7) 夫: 「結婚式は3月の末だったなあ」  
妻: 「そうよ、あの時は桜が満開だったわ」(共有知識)

(*ibid.*: 27)

- iv) 未来については「その時」が用いられる。

- (8) 「来月、語用論の研究会がありますね。その時またお会いしましょう」

(*ibid.*: 27)

V) 歴史的イベントについては一方知識の「その時」を使用することが多い。

- (9) 頼朝は挙兵に成功するとすぐさま鎌倉に入り、根拠地にした。  
そのころの鎌倉は草深かった。

(*ibid.*: 27)

そして上記の分析の結果が、以下のように図式化されてまとめられている (*ibid.*: 28)。

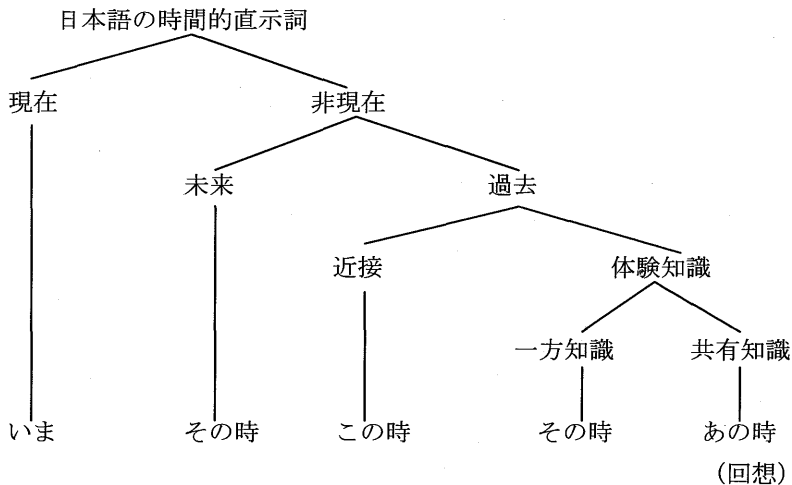


図 1

### 2.2.2. 吉本 (1992)

吉本 (1992) においても、小泉 (2001) と同様に、「この時」「その時」「あの時」に関する分析がなされている。吉本 (1992) での分析を要約すると以下ようになる。

- ・今は談話記憶に関係なく用いられるので明らかに現場指示である。
- ・ソノ時とコノ時は話し手のいる現時点に関係なく談話記憶のみにもとづいて同定されるので文脈指示である。
- ・アノ時は出来事記憶にもとづく同定という点で、現場指示の性格を強く持つ。
- ・アの現場指示は会話空間外の事物の指示、いわゆる遠方指示である。このことは、アのいわゆる文脈指示用法では一定以上の時間を経た過去に経験した事物・出来事の記憶を蓄える出来事記憶中での確立という形で反映していると考えることができる。実際、わずかな秒前の時点はいくら過去でもアノ時で指示することはできない。

(*ibid.*: 117-118)

### 2.3. 先行研究の問題点

以上、指示詞の時間表現に関わる先行研究を概観した。ここでは従来の先行研究の問題点として、「言及されている時間表現の数自体が少なく、その詳細な全体像が提示されていない」という点を指摘する。

堀口(1978)や金(2004)では「絶対指示」や「象徴的用法」の一部として「コ系指示詞の時間表現が現在を指示する」という指摘があるのみであり、ソ系やア系の時間表現までを含めた指示詞の時間表現の包括的な分析が行われているわけではない。小泉(2001)と吉本(1992)での分析もまた「この時」「その時」「あの時」に言及されているのみであり、指示詞の時間表現の全体像が描出されているとは言い難い。考察の対象となっている表現の数自体が少なく、その他の時間表現も扱う必要がある。また、小泉(2001)では「一方知識」や「共有知識」、「体験知識」や「回想」といった用語が用いられているが、それらの定義が明確になされているわけではない。

本論ではコソア時間表現のより包括的な記述を行い、その後、認知文法の観点から考察を行う。

次節ではまず、指示詞の時間表現の全体像を描出するために、ソ系時間表現とア系時間表現について検討を加える。また本論では絶対指示以外のコ系時間表現、すなわち「視点遊離のコ」や「解説のコ」として用いられるコ系時間表現の分析には立ち入らない。本論では絶対指示のコ系時間表現のみを考慮に入れる<sup>2</sup>。

## 3. 指示詞の時間表現の包括的な記述

「絶対指示」や「象徴的用法」として分析されてきたコ系時間表現については、ここでは先行研究の指摘通りに「現在」を指示するものとする。以下では、ソ系とア系の時間表現の時間軸上での分布を詳細にみていくことにする。

### 3.1. ソ系時間表現

まずソ系時間表現を取り上げる。

まずはいわゆる「文脈指示」として用いられるソ系時間表現を取り上げる。以下がその具体例である。

- (10) ここで見られたのは、大きくなって非行に走った子供は三歳までに母親が、「この子は育てにくい子だ」と書いていた率が高い、ということでした。すると、こうした子には親子の人間関係にその頃から問題があった、ということがわかるわけです。  
(養老孟司『バカの壁』)
- (11) 麟太郎は月末に順動丸を大坂へ廻航してくる。龍馬はそれまでに、ひとりでも多く、海軍塾への入門者を集めなければならない。  
(津本陽『龍馬』)
- (12) 当時、向島の川岸は護岸工事も整わず、草の間に小さな溜りのように川水が入り、

二人はそこで鮎を探したり、水鉄砲で打ち合ったりした。その夏、兄は祖父に買ってもらった新しい水鉄砲を持っていた。(田久保英夫『仮装』)

- (13) 十九歳の誕生日は、大学の後期授業が始まる月曜日だった。その朝、最初に心に浮かんだのは、十代最後の一年が始まるということではなく、昨夜も父は帰宅しなかったということだった。(松本侑子『花の寝床』)

上記4例のソ系時間表現は文脈指示として用いられている。(10)では、「その頃」は「三歳まで」を受けている。(11)では、「それまで」は「鱗太郎が月末に順動丸を大阪へ廻航してくる」までという意味になる。(12)では先行文脈に存在する『「当時」の夏』という意味で「その夏」が用いられている。(13)では、先行文脈の『「十九歳の誕生日」の朝』という意味で「その朝」が用いられている。このように、文脈指示のソ系時間表現には、明確な先行詞が存在する。

また上記の例から明らかなように、文脈指示のソ系時間表現は過去と未来双方の事態を指示することが可能である。(10)(12)(13)のソ系時間表現は過去の事態を受け、(11)では未来の事態を受けている。過去の事態のみ、もしくは未来の事態のみしか指示することができないといった時間的な制限はソ系文脈指示の時間表現には存在しない。

続いて、先行文脈に明示的な先行詞が存在せずとも使用可能であり、「過去のある時点から先」の時間帯や、「発話時以後の時間帯」を示すソ系時間表現を取り上げる。「そのうち」と「そこ」である。これはいわゆる「曖昧指示」(金水 1999)にあたる表現である。金水 (1999)では、「照応すべき言語的文脈をもたない上に、指示対象がはっきり特定できない」ようなものであり、「むしろ、特定できないことを表現効果として生かしている」表現を「曖昧指示」と呼んでいる (*ibid.*: 85)。

時間表現におけるソ系曖昧指示表現のうちのひとつが「そのうち」である。

- (14) 白井は少々馬鹿らしくなって来た。見かけはインテリっぽいが、やっぱりちょっとおかしいんじゃないか、と思った。そのうち、資金を提供してくれ、などと言い出すかもしれない。(赤川次郎『三毛猫ホームズのびっくり箱』)
- (15) 彼の子供時代のもので、父親もまだ若く、それに寄り添うように典型的なタイ人の婦人が写っていたが、それがナタポンの母親で彼が幼い頃亡くなったということだった。そのうち、外でバイクの止まる音がしたかと思うと、男がひとりのそりと入って来た。(熊澤文夫『メーサイ夜話』)

上記の例が示す通り、文脈指示のソ系時間表現と異なり「そのうち」には先行文脈に明示的な先行詞が存在しない。そして「過去のある時点から先」の時間帯や、「発話時以後の時間帯」を示す。

また、「そこ」を含む時間表現も、曖昧指示として用いられる場合がある。

- (16) 入学希望者数より定員のほうが多いのだから、極端な話、答案用紙に名前さえ書ければ入れる時代がすぐそこまでやってきている。  
(和田秀樹『ユダヤに学ぶ世界最強の勉強法』)
- (17) 実は、預金封鎖＝財産税導入を行う、絶妙のタイミングがすぐそこに近づいている。  
(副島隆彦『預金封鎖』)

上記 (16) (17) の「そこ」にも明確な先行詞は存在しない<sup>3</sup>。発話時以後の漠然とした時間帯を指し示している。これもまた、「そのうち」と同様に曖昧指示のソ系時間表現である。

このように、時間表現として用いられるソ系表現にも曖昧指示表現が存在する。それらは明確な先行詞を持たず、時間軸上では過去もしくは未来の不定時を示す。

更に、「その日」「その場」などを二回繰り返す「その日その日」「その場その場」といったソ系時間表現も存在する。これらも時間軸上の値は「不定」であり、過去でも現在でも未来でもない不特定の時点を示す。これは金水他 (2002) において「匿名指示」と呼ばれている表現の一種であると考えられる。金水他 (2002) によれば、匿名指示とは「本来、固有名詞や直示表現などの固定指示的な表現が入るべき項に、あえて名を伏せるために本来の表現と取り替えたり、定型書類の空白欄のように内容未定のまま、あたかも本来の表現が入っているかのようにする表現 (ibid.: 226)」であると定義されており、具体例としては「その日の気分でめがねを替える」「その場しのぎ」などが挙げられている。金水他 (2002) において取り上げられている表現以外にも、以下のようなソ系時間表現が存在する。

- (18) そしてまた、彼らの情緒的な表現、あるいは言語的表現も極めて曖昧であり、その時その時の感性で表現するだけである。  
(町沢静夫『若者の心の病がわかる本』)
- (19) 編集の仕事はストレスがたまりやすいので、その場その場で発散しなければなら  
ない。  
(赤羽建美『イヴの贈り物』)
- (20) 入場してからも、人混みにイライラせず、その瞬間その瞬間をエンジョイしていたのは、耕ちゃんだけだった。  
(町田おやじの会『障害児なんだ、うちの子』って言えた、おやじたち)
- (21) 松下政府委員財産の状態でございますとか、これに対する需要でございますとか、それらはその年その年の情勢でだんだん変わってまいりますので、...  
(『国会会議録』)
- (22) 放埒に生きて、人をも身をも顧みる余裕のなかったぼくに、祖母の教訓が入ってくる  
ところではない、ただその日その日を完全燃焼させていたわけです。  
(加山雄三『この愛いつまでも-若大将の子育て実戦記-』)



こうした匿名指示の用法もまた、ソ系の時間表現に存在する。

以上が時間表現として用いられるソ系表現である。ソ系時間表現は過去・未来に特化した表現ではない。

### 3.2. ア系時間表現

続いて、ア系の時間表現について考察する。以下の具体例が表すように、ア系の時間表現は、過去の事態しか指示することができない。

- (23) ところが、私の文学の師であった辻のほうは、一向に小説を書きだそうとはしなかった。あの頃は、辻が自分自身を整理し、じっと自らが成熟するのを待っていた時期といってもよいだろう。(北杜夫『マンボウ交友録』)
- (24) ところが、革命なんて、いつの世でも、陽炎みたいな、もやもやと形のないものです。亡霊みたいなものです。だから、宋はあの年の三月、春を見ないで死んでよかったのです。(久世光彦『陛下』)
- (25) 歴史となった出来事について間違っただけということは、過去について、あの時はこうすれば良かったということで意味はないけれども、しかし将来について考えるとすれば、それにも積極的な意味が生じると思う、といったのです。(大江健三郎/林京子『日本の「私」からの手紙』)
- (26) 自分自身を振り返ってみて、もう二十六年も昔のことになるんだと気づいて、いまの和志と同じ小学六年生の夏、晋さんが暴力事件を起こしてふるさに帰ってきたあの夏の、ねっとりとした肌にまとわりつくような蒸し暑さを思う。(重松清『口笛吹いて』)
- (27) ようすをうかがいに外へ出てみると、いちめんの星でした。あの夜の星空のきれいだったこと、わすれられません。(松谷みよ子『松谷みよ子の本3』)

上記の例においても、全てのア系時間表現は過去の事態を指示している。

ア系時間表現は、未来に起こる事態を指示することはできない。古田 (1957) では古くはア系で未来の事態を指示することが可能であったという指摘がなされているが、現代語のア系時間表現は未来の事態を指示することはできない<sup>5</sup>。現在からどれほど「遠い」事態であろうと、未来の出来事をア系時間表現で受けることは不可能である。

- (28) 来週の火曜日に研究室に伺いますので、{その時／\*あの時} に詳しくご相談させてください。
- (29) 今週末はイベント盛りだくさんだから、{それまで／\*あれまで} には宿題を終わらせておこう。
- (30) 50 億年後には太陽は消滅するから、地球もなくなる。まあ、{その頃／\*あの頃} に

は人類は滅亡していると思うけど。

(筆者による作例)

また、小泉 (2001) での指摘とも関わることであるが、指示対象が過去の事態であっても、話し手が自ら直接経験した過去の事態以外はアで指すことは難しくなる。

(31) 子どもの父親に向けての発言:

「お父さんたちの結婚式は9月にあったんでしょ？{その時／??あの時}の様子はど  
うだった？」

(筆者による作例)

このように、話し手が持つ「過去の出来事の知識状態の差」が、過去の出来事を指示する際のア系とソ系の使い分けに現れ、ア系は「話し手が直接経験した出来事」以外は指示することが難しくなる。そしてこれが、小泉 (2001) で指摘されている「歴史的イベントはソで示されることが多い」という現象が起きる理由であると考えられる。歴史上の出来事は、話し手が直接経験できない過去の事態であることが多くなるために、ソ系時間表現が用いられることになるのであろう。

また、吉本 (1992) でも指摘されているように、たとえ過去の出来事でも、発話時近辺の出来事をア系表現で示すことはできない。

(32) 10 分前まで研究室で作業していたけど、{その時間帯／??あの時間帯} はまだ誰も  
研究室にはいなかった。

(筆者による作例)

このように、吉本 (1992) や小泉 (2001) で取り上げられている「あの時」以外のア系時間表現も過去に特化した表現であり、現在と未来を指示することはできない。そして過去の事態であっても話し手が直接経験した出来事以外は指示することが難しくなる。また、発話時直前の事態も指示することができない。

### 3.3. 時間表現における「対立型」と「融合型」

これまでの考察をまとめると、時間表現における指示詞は、「コ＝現在、ソ＝不定・曖昧、ア＝過去」という時間軸上の分布を示すことになる。つまり、コ系とア系は時間軸上で「現在と過去」という形で明確な分布を示すが、ソ系時間表現に関しては、時間軸上で明確な分布は示さないことがわかる。これはコとアが対立し、ソがそのあいだを埋め合わせる「融合型」の構造であり、田窪 (1990) での時間ダイクシスの分類と一致する。

ここで簡単に「対立型」と「融合型」について触れておく。日本語の指示詞における「対立型」とは、「話し手が話し手と聞き手の位置を現場文脈の中で相対的・対立的にとらえて行う指示」(仁田 (編) 2009: 27) であり、コとソが対立する (*ibid.*: 27)。

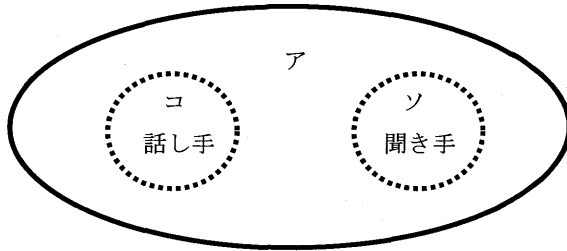


図 2

一方「融合型」とは、「話し手が自分と聞き手の位置を現場文脈の中で融合的にとらえて行う指示」であり、「話し手と聞き手の近くにある対象はコ系の指示詞が、話し手と聞き手の両方から遠くにある対象を指示する時にはア系の指示表現が用いられる」(ibid.:28) 構造であり、コとアが対立する。

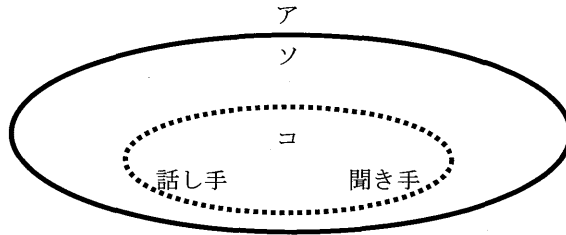


図 3

田窪 (1990) においても、時間ダイクシスは「融合型」の構造をとることが以下の例によって示されている。田窪 (1990) では、「時間のダイクシスは融合型をなし、対立型はないことになる。反対に、単数の一人称、二人称は対立型をなし、融合型はない。指示詞は、融合型と対立型の二つがあるというわけである」(ibid.: 131) と述べられている。

(33) 君は、きょうの昼その席で食事をしたって。

(ibid.: 131)

この例では、『きょう』という時間のダイクシスは、立場の違いを反映しないのに対し、同じ対象が、『私』『この席』は、立場の違いで、『君』『その席』に変わってしまう。つまり、時間のダイクシス表現では、話し手と聞き手は共通の立場にたっている」(ibid.: 130) と指摘されている。

こうした時間ダイクシスの特徴が日本語指示詞の時間表現においてもみられるのである。時間表現においては、コとアが「現在」と「過去」で対立関係にあるのに対し、ソは「コ

でもアでもない領域」を埋め合わせるように指示するという構造になっている。先に見たように、ソ系時間表現には、文脈指示として用いられるものや先行詞が存在せずとも使用可能な「そのうち」や「その瞬間その瞬間」や「その折その折」などの曖昧指示や匿名指示用法のものがあり、コ系・ア系表現と異なり過去や現在のみを指示するという時間的な制限は存在しない。このような「コとア」の対立のみがみられるという点で、時間表現における指示詞もまた「融合型」のパターンを示している。空間と異なり、時間は「話し手」と「聞き手」の観点から領域を分割することができない。「聞き手のそばにある空間」と同じ意味で「聞き手のそばにある時間」を認識することは不可能である。これが時間表現においても「対立型」の構造が出現しない理由であると考えられる。

ここまで考察してきたコソア時間表現をまとめると、以下のようになる。

表 1

過去	ア・ソ (文脈指示・曖昧指示・匿名指示)
現在	コ (絶対指示)
未来	ソ (文脈指示・曖昧指示・匿名指示)

まずはここまで、日本語指示詞の時間表現の具体例を検討し、時間軸上での分布などを整理した。次節では、ソ系とア系の「知識状態の差」による使い分けと時間軸での分布を統合して分析を行うために Langacker (1991) のモデルを用い、認知文法の観点から考察を行う。

#### 4. Langacker (1991) の 3 つのモデルと日本語指示詞の時間表現

従来も小泉 (2001) での「一方知識」「共有知識」「回想」などの用語を用いた分析がなされてきたように、時間表現における指示詞に対しても、「知識状態の差」を考慮せずに分析を行うことはできない。ここでは、そうした「知識状態の差」と「時間軸上での分布」を統合して日本語指示詞の時間表現の全体像を描出するために、Langacker (1991) のモデルを導入する。

##### 4.1. Langacker (1991) の 3 つのモデル

ここで Langacker (1991) のモデルを概観する。まずは基本的認識モデル (Basic Epistemic Model) である (*ibid.*: 242)。

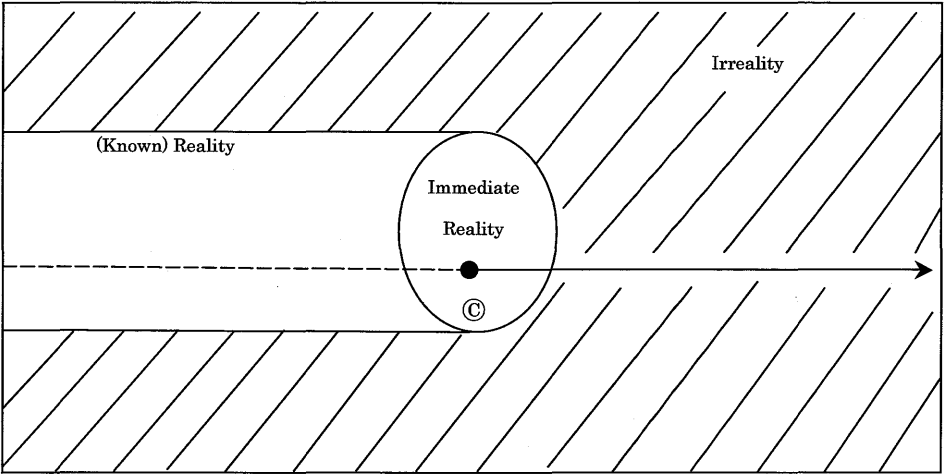


図 4

基本的認識モデルとは、この後で触れる 2 つのモデルの基本形として捉えられるものである。このモデルは、「概念化者」(conceptualizer) が「現実」(reality) と「非現実」(irreality) を区別していることを示している。また、ここでいう「現実」は、それ以前の「出来事」(history) を受け継いで絶えず発展していくものとして定義されている。また、「出来事」の発展段階の最先端の部分であり、概念化者が物事を見て、直接的に認識できる領域が「即時的現実」(immediate reality) である。そして「現実」以外の全ての領域が「非現実」とされている。そして、ある状況が「現実」の領域に属するか、「非現実」の領域に属するかは、その状況がどのように起こり発展してきたかによるのではなく、「概念化者」がそれを知っており、かつ認めているかどうかという概念化者の主観によって決定される。

2 つめのモデルは精緻化認知モデル (Elaborated Epistemic Model) である。

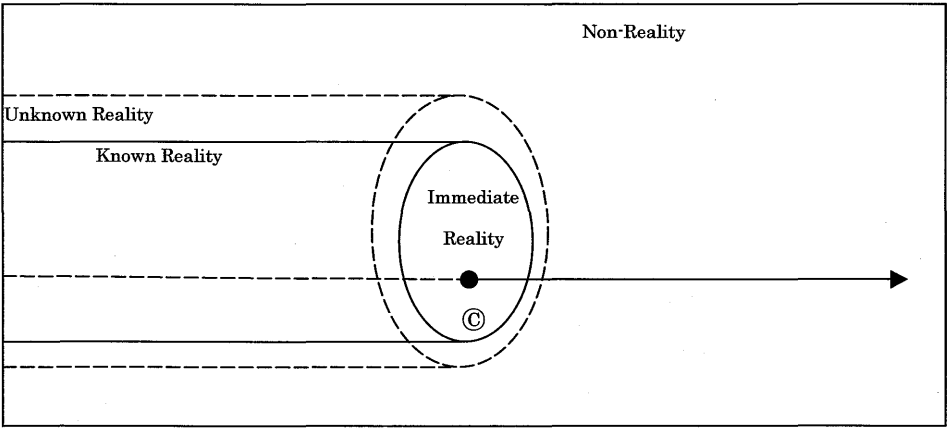


図 5

このモデルには、基本的認識モデルにおいて「現実」とされていた領域が「既知現実」(known reality) と「非既知現実」(unknown reality) の2つに区別されている。「非既知現実」の領域には、「概念化者」が実在的ではないかと想像してはいるが確信するまでには至らない状況や、全く知らない状況などが含まれる (ibid.: 244)。

3つめのモデルは時間軸モデル (Time-Line Model) である。基本的認識モデルに対して、このモデルにはグラウンド (G) と時間軸 (t) の2つの要素が加えられている (ibid.: 242)。

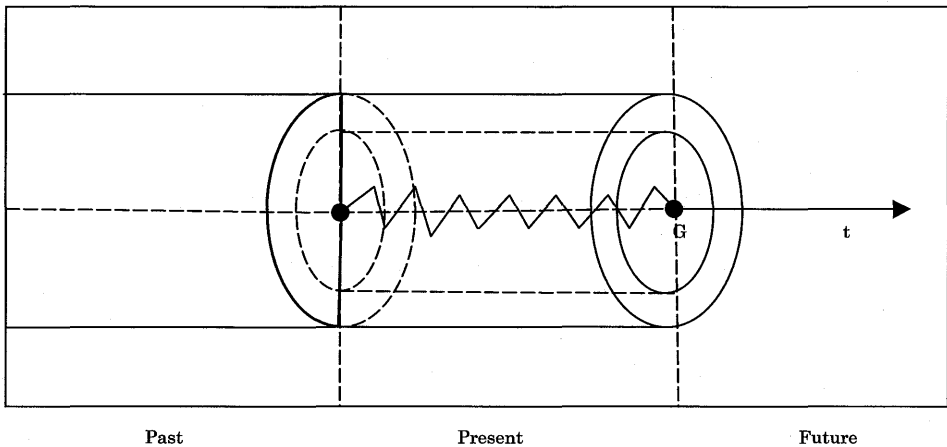


図 6

発話が行われる場所は「即時的現実」である。ここから話し手と聞き手は表現の意味を概念化する。また、このモデルでは発話時間の「幅」が明示されており、それが波線で示されている。そして、発話と関わるグラウンド (G) と「即時的現実」を起点として、過去・現在・未来の分割が行われている。

#### 4.2. Langacker (1991) のモデルからみた指示詞の時間表現

ここからは、上記の Langacker (1991) で提示されているモデルのうち、精緻化認知モデル (Elaborated Epistemic Model) と時間軸モデル (Time-Line Model) を指示詞の時間表現の分析に応用していく。具体的には、この2つのモデルを組み合わせることにより、認知文法の観点から時間表現における日本語指示詞の全体像を提示する。

上記2つのモデルを組み合わせる理由は、以下の要素を同時に明示化するためである。

- (34)
- i. 時間軸
  - ii. グラウンド
  - iii. 「現在」の幅
  - iv. 知識状態の差

まず、時間表現の分析を行う以上、図式内に時間軸が明示されていなければならない。また、発話状況・発話時を示すためにグラウンドも導入する必要がある。指示詞の時間表現、特にコ系時間表現とア系時間表現は直示的な表現であり、発話時を基点としてその指示対象の値が決定されるためである。そして「現在」が発話時という「瞬間」ではなく、「幅」を持つことを明示する必要がある。なお、前出のように Langacker (1991) の時間軸モデル (Time-Line Model) では、現在が持つ幅は「発話時」の幅である。これを「話し手が現在だと認識している範囲＝コの範囲」にまで拡張する。

また、過去の事態を指示する際のソ系時間表現とア系時間表現の差異を明示化するために、精緻化認識モデル (Elaborated Epistemic Model) の「既知現実」と「非既知現実」の区別を導入する。過去の事態を指示する場合には、話し手の「知識状態の差」によりソとアの使い分けがなされる。具体的には、話し手が実際に自ら経験していない出来事はアで示しにくくなる（歴史上の出来事など）。この差異を明示するために、精緻化認識モデル (Elaborated Epistemic Model) の「既知現実」と「非既知現実」の区別を導入する<sup>6</sup>。これにより、「知識状態によるソとアの差異」も同時に明示することが可能となる<sup>7</sup>。

以上の点を踏まえて前出の2つのモデルを組み合わせると、以下のように図式化できる。

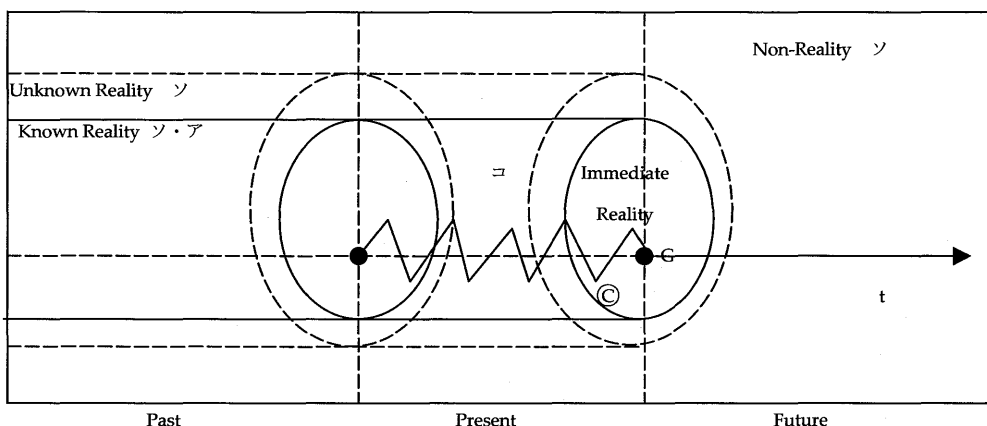


図 7

上の図で、横の破線は「非既知的現実」を、実線は「既知現実」を、また波線は「話し手が現在だと認識している範囲＝コの範囲」を表すものとする。

現在を指示するコ系の「絶対指示」は「現在」 (present) の領域を指し示す<sup>8</sup>。

ソ系時間表現は、話し手が自ら直接経験した事態も、自らは直接経験していない事態も共に指示することができる。すなわち、ソ系時間表現は「既知現実」と「非既知現実」の双方の事態を指示することが可能である。

また、未来もその性質により、「現実」ではなく「現実外」 (non-reality) の領域に属する。未だに起こっていない出来事が「既知現実」として認識されることはない。よって、

未来の領域は全てコ系とア系では直示不可能な「現実外」の領域であり、ソ系時間表現が用いられる領域となるのである。

残るア系時間表現は、先の節でも述べたように過去の事態のみを指示する。また、たとえ過去に起こった出来事であっても、話し手が直接経験していない出来事（歴史的事件など）を指示することは難しくなる。すなわち、ア系時間表現は過去の出来事で既知現実 (known reality) の領域にある事態のみを指示する。そしてここまでの考察をまとめると、次のようになる。

表 2

コ...現在、既知現実 (known reality)、非既知現実 (unknown reality)
絶対指示
ソ...過去、未来、既知現実 (known reality)、非既知現実 (unknown reality)
文脈指示 (その時、その頃...)、曖昧指示 (そのうち、そこ)
匿名指示 (その瞬間その瞬間、その時その時...)
ア...過去、既知現実 (known reality)
(あの頃、あの当時...)

#### 4.3. 指示詞と時制の相関性と本論の考察

Langacker (1991) では、「時間的な遠・近 (過去・現在)」と「指示詞の遠・近」、及び「定性 (definiteness)」と「既知現実 (known reality)」の類似性が指摘されている (*ibid.*: 245)。

In this regard it is quite analogous to an English demonstrative. Indeed, definiteness (presupposed mental contact with a referent) is very similar to the acceptance of a situation as part of known reality, and the proximal/distal contrast in demonstratives corresponds to the PRES/PAST opposition.

本論の分析は、この Langacker (1991) の指摘の妥当性を示したといえる。本論の分析を通して、「指示詞の遠・近」と「現在と過去」の対比がコ系とア系時間表現の対比関係に反映されており、かつ過去の事態を指示する際は「知識状態の差」も考慮する必要があり、そのために「既知現実」、「非既知現実」の区別を導入する必要もあること、及びア系時間表現は「既知現実」の領域を指示することを指摘した。以上により、日本語指示詞の時間表現にも Langacker (1991) の時制分析のモデルを適用することが有効であることを示した。

#### 5. まとめと今後の課題

本論では、まず指示詞の時間表現の時間軸上での分布を整理し、指示詞の時間表現も融合型の構造を取り、対立型の構造を取ることは不可能であることを指摘した。その後、Langacker (1991) における時制分析のための 3 つの認識モデルを指示詞の時間表現の分析



に応用した。今後の課題としては、まず「聞き手」を考慮に入れた分析を挙げる。今回の分析では、「話し手」と「聞き手」の知識状態の差を含めた分析までは行うことができなかった。これは今後の課題としたい。また、「あの頃」や「あれから」などのア系時間表現と、話し手と聞き手による「知識の共有」の関連性についても考察することができなかった。こうしたア系と知識の共有性の問題は、東郷 (2000) などにおいて議論されている重要な問題である。この観点からの考察も今後の課題としたい。最後に、時制 (ル・タ・テイル・テイタなど) も含めた日本語時間表現・ダイクシス表現の統合的な分析も今後の課題とする。Janssen (2002) などでは、指示詞と時制を認知言語学の観点から統一的に扱うための議論がなされている。今後、日本語の指示詞や時制表現の研究においても、このような観点からの考察が必要となると考えられる。

## 注

- 岡崎 (2010) では「絶対指示」や「象徴的用法」という分類を設けることに疑問が呈されているが、時間表現の「絶対指示」に関する言及はなされていない。
- いわゆる絶対指示のコ系時間表現の詳細な議論は田口 (2011) を参照されたい。
- 金水・田窪 (1992) では、「すぐそこ」のように「すぐ」によって修飾可能であるという性質は「ここ／あそこ」にはないもので、「すぐそば／近く」と並んで「ここ」ではないが遠くない、中距離性を示していると分析されている。そして「すぐ」は時間的な概念を含んでおり、移動によって到達可能であるという「到達可能性」というモーダルな性質が関係していると述べられている (*ibid.*: 188)。
- 「曖昧指示」の具体例としては、金水・田窪 (1992) で以下のような表現が提示されている。
  - これ、ついそこの菓子屋で買ってきたんだけど、食べる？
  - 「おでかけですか」  
「ええ、ちょっとそこまで」
  - 最近のアイドル歌手はそのへんにいる女の子と変わらない。

(*ibid.*: 138-139 下線は筆者による)
- 古田 (1957) におけるア系時間表現への言及は以下の通りである (*ibid.*: 34)。  
「さらに、あなたの方には...過去、未来、どちらの時間をさす場合もある。...「目の前に見えぬあなたの事」(源氏・若菜上)「物のあなた」(同・鈴虫)は未来の場合の用例である。類聚名義抄(観智院本)には「以往」に「アナタ」とあつたりするから、あるいは過去をさす場合の方が多かつたかも知れないが、いづれにせよ、時間的なある限界から向かうをさすものである。ここにも隔たりは示されてゐる。」
- 少なくとも本論の分析の観点からいえば、この「既知現実」(known reality)と「非既知現実」(unknown reality)の差異は、証拠性(evidentiality)の差異と同等のものと考

えてよい (Langacker による私信 2011/7/17)。

7. この既知現実 (unknown reality) と非既知現実 (non-reality) の領域は、金水・田窪 (1996) での I-領域、D-領域と対応するものであると考えられる。

金水・田窪 (1996) における D-領域の特徴は「その要素の属性が、記憶の要素と現場から必要に応じてアクセスできること」であるとされている。これに対して、I-領域の特徴は「対話のための一時的な情報格納領域で、対話の際に言語的に得られた属性しかアクセスできない」ことであるとされている (ibid.: 65)。

D-領域 (長期記憶とリンクされる)

- : 長期記憶内の、すでに検証され、同化された直接経験情報、過去のエピソード記憶と対話の現場の情報とリンクされた要素が格納される。
- : 直示的指示が可能。

I-領域 (一時的作業記憶とリンクされる)

- : まだ検証されていない情報 (推論、伝聞などで間接的に得られた情報、仮定などで仮想的に設定される情報) とリンクされる。
- : 記述などにより間接的に指示される。 (ibid.: 66)

この2つの領域の特徴は、Langacker (1991) の既知現実 (unknown reality) と非既知現実 (Non-reality) の特徴と並行したものであると考えられる。

8. 現代日本語では、「今頃」という語もまた「現在・非既知現実」の領域を表す表現として考えることが出来る。この「今頃」に関する詳細な議論は田窪・笹栗 (2001) などを参照されたい。

## 参考文献

- Radden, Gunter and Rene Dirven. 2007. *Cognitive English Grammar*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamin.
- Diessel, Holger. 1999. *Demonstratives: form, function, and grammaticalization*: Amsterdam, Philadelphia: J. Benjamins.
- Fillmore, Charles J. 1997. *Lectures on Deixis*, Stanford: CSLI Publications.
- Fillmore, Charles J. 2001. Mini-grammars of some time-when expressions in English, Joan Bybee and Michael Noonan (eds.) *Complex Sentences in Grammar and Discourse*, 31-59, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 古田東朔. 1957. 「代名詞遠称『あ』系語と『か』系語の差異」. 『文藝と思想』14, 福岡女子大学文学部, 26-35.
- Haspelmath, Martin. 1997. *From Space to Time, Temporal Adverbials in the World's Languages*, München: LINCOM EUROPA.

- 堀口和吉. 1978. 「指示語の表現性」『日本語・日本文化』8, 大阪外国語大学, 23-44.
- 堀口和吉. 1990. 「指示詞コ・ソ・アの表現」『日本語学』(9), 59-70.
- Janssen, Theo A. J. M. 2002. Deictic principles of pronominals, demonstratives, and tense, *Grounding: The Epistemic of Deixis and Reference*. Berlin/New York: Mouton De Gruyter, 151-193.
- Kaplan, David. 1989. Demonstratives. J. Almog, J. Perry & H. Wettstein (ed.), *Themes from Kaplan*, 481-563, Oxford: Oxford UP.
- 金善美. 2004. 「現場指示と直示の象徴的用法の関係-日韓対照研究の観点から-」『日本語文法』4(1), 日本語文法学会, 3-21.
- 金水敏・田窪行則. 1996. 「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3-3, 日本認知科学会, 59-74.
- 金水敏・田窪行則. 1992. 「〈解説篇〉 日本語指示詞研究史から／へ」, 金水敏・田窪行則 (編)『指示詞』, 東京: ひつじ書房, 151-192.
- 金水敏. 1999. 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6(4), 言語処理学会, 67-91.
- 金水敏・岡崎友子・曹美庚. 2002. 「指示詞の歴史的・対照言語学研究 —日本語・韓国語・トルコ語—」, 生越直樹 (編)『シリーズ言語科学 4 対照言語学』, 東京: 東京大学出版会, 217-247.
- 小泉保. 1988. 「空間と時間における直示の体系」『言語研究』(94), 日本言語学会, 1-24.
- 小泉保. 2001. 『入門 語用論研究-理論と応用-』東京: 研究社.
- 熊谷政人. 2004. 「指示詞「カノ」「アノ」について」『語文研究』(97), 九州大学国語国文学会, 27-41.
- 久野障. 1973. 『日本文法研究』. 東京: 大修館書店, 185-190.
- 黒田成幸. 1979. 「(コ)・ソ・アについて」『英語と日本語と - 林栄一教授還暦記念論文集』. 41-59, 東京: くろしお出版.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol.2, Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York: Oxford University Press.
- Lenz, Friedrich (ed). 2003. *Deictic Conceptualisation of Space, Time and Person*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Levinson, Stephen C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lyons, John. 1977. *Semantics 2*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 三上章. 1970. 「コソアド抄」『文法小論集』. 145-154, 東京: くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会 (編). 2009. 『現代日本語文法 7 談話・待遇表現』東京: くろしお出版.

- 仁田義雄. 2002. 『副詞的表現の諸相』 東京: くろしお出版.
- 岡崎友子. 2010. 『日本語指示詞の歴史的研究』 東京: ひつじ書房.
- 李長波. 2002. 『日本語指示体系の歴史』 京都: 京都大学学術出版会.
- 佐久間鼎. 1951. 『現代日本語の表現と語法(改訂版)』 .2-43, 東京: 厚生閣.
- 正保勇. 1981. 「「コソア」の体系」『日本語の指示詞』 .51-122, 国立国語研究所.
- 高橋太郎. 1956. 「「場面」と「場」」『国語国文』, 53-61.
- 田口慎也. 2011. 「日本語指示詞の時間表現に関する認知言語学的考察」, 京都大学 人間・環境学研究科 修士論文.
- 田窪行則. 1990. 「ダイクシスと談話構造」『日本語と日本語教育 12』 .127-147, 東京: 明治書院.
- 田窪行則・笹栗淳子. 2001. 「「今」の対応物を同定する「今ごろ」について」 南雅彦・アラム佐々木幸子(編)『言語学と日本語教育Ⅱ』 .39-55, 東京:くろしお出版.
- 東郷雄二. 2000. 「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」『京都大学総合人間学部紀要』 (7), 京都大学総合人間学部, 27-46.
- 渡辺伸治. 2003. 「ダイクシスと指示詞コソア」『言語文化研究』 (29), 大阪大学言語文化部・言語文化研究科, 417-434.
- 山梨正明. 1992. 『推論と照応』 東京: くろしお出版.
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』 東京: ひつじ書房.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』 東京: くろしお出版.
- 吉本啓. 1992. 「日本語の指示詞コソアの体系」, 金水敏・田窪行則(編)『指示詞』, 東京: ひつじ書房, 105-122.

#### <引用辞典>

『古語大辞典』1983 東京: 小学館.

#### <使用コーパス>

国立国語研究所. 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」 モニター公開データ(2009年度版)  
Sketch Engine (<http://www.sketchengine.co.uk/>)